

形成外科初期臨床研修プログラム（選択科）

研修責任者 山口 智彦

研修期間のめやす：4 週～

（※将来、外科系医師を志している者は 8 週以上の研修を推奨します）

I. 対象となる疾患・病態

対象となる疾患・病態は、およそ以下の通りである。

体表面の外傷(とくに顔面)

顔面骨骨折(前頭骨、鼻骨、眼窩、上顎、頬骨、下顎など)

熱傷およびその後遺症

先天奇形(耳・顔面・手足・臍など)

皮膚良性腫瘍・悪性腫瘍

がん切除後などの組織欠損に対する再建手術(乳房再建など)

褥瘡・難治性潰瘍

きずあと・ケロイド・瘢痕拘縮

眼瞼下垂、わきが、その他の整容的な問題 など

II 研修到達目標

一般目標(GIO:General Instruction Objective)

形成外科は、一言で表すならば「見た目の外科」である。形態や機能の異常を、主に外科的手段によって正常に戻すことを目的としている。このプログラムでは、「形成外科領域における代表的な疾患の診断法・治療法を理解し、基本的な手技を習得する」ことを目指す。

行動目標(SBOs :Structural Behavior Objectives)

① 創傷治癒の理論を学び、実践する

創傷の種類とそれぞれの特徴を知り、状況や部位に応じて適切な処置ができるようになる。

各種の軟膏、創傷被覆材、陰圧閉鎖療法についてその長短を理解し、使い分けができるようになる。

② 各種の縫合法・植皮法を習得する

縫合糸の特徴を理解し、適切な使い分けができるようになる。

皮下縫合、真皮縫合、皮膚縫合の要諦を理解し、合理的で速く正確な縫合ができるようになる。

分層植皮・全層植皮・各種バリエーションのそれぞれの目的と特徴を理解する。

採皮から植皮片固定、術後管理にいたるまでの一連の手技ができるようになる。

③ 顔面骨骨折の基本的知識を身に着ける

特徴的な理学的所見・画像所見について理解し、診断ができるようになる。

緊急性の有無について判断でき、適切な初期対応ができるようになる。

手術方法を中心とした骨折治療の要諦を理解する。

- ④ 熱傷について初期対応や手術療法などの治療、後遺症への対応などについて理解する
熱傷の深度判断ができるようになる。
初期対応や適切な手術時期および方法の選択ができるようになる。
創治癒後に生じる後遺症など QOL 低下する要因や治療可能な後遺症について理解する。

Ⅲ. 方略

- ① 外来および病棟において、指導医とともに創傷を診察し、創処置を行う。
- ② 手術室や外来において、指導医の下で各種縫合を行う。
手術室において、指導医の下で採皮、縫着、固定、ドレッシングの各手技を行う。
- ③ 外来および病棟において、指導医とともに顔面外傷患者の診察を行う。
画像所見についてみずから評価し、その後指導医とともに検討を行う。
手術室において、助手として骨折整復術を経験する。
- ※ その他
受け持った症例については、カンファレンスにおいて発表し、治療方針の決定にも積極的に関与する。
形成外科領域の学会（日本形成外科学会各関連学会、創傷外科学会、創傷治療研究会など）に参加し、症例報告などを行うこともある。

Ⅳ. 評価

獲得した形成外科的知識・技術の確認を、ローテーション終了時に行う。必要に応じて、研修期間の途中でも適宜確認を行うことがある。

Ⅴ. 研修医への提言

QOL を重視した医療が求められる昨今、形成外科が担う役割は大きくなってきています。たとえ将来どの科にすすむにせよ、形成外科医の視点とマインドを身につけておくことは、あらゆる医療場面においてかならず役に立つはずです。当科は「見た目の外科」であり、「結果の外科」です。講義や教科書で二次的に学習するだけでは、絶対にその存在意義や真価を理解することはできません。数週間という短い期間であっても実地に見聞し、体験するという真の意味での知ることが重要であり、それがあなたの医師人生の貴重な財産となり得ます。